

青少年くらし

家庭版

発行
倉敷市教育委員会
編集
生涯学習課
☎ 426-3845

1月



「子どもの命をみんなで守る」(一)

今回は、川崎医科大学附属病院 救急科・高度救命救急センター部長の椎野泰和先生からお話をいただきました。先生はドクターヘリに十四年乗機され、いち早く現場に到着し治療にあたっているといわれています。もちろん、病院でも二十四時間体制で、救急医療に携わっておられます。命と向き合っておられる先生ならではのお話を伺いました。

救命救急医への道

ぼくが救急医になったのは、他のお医者さんとはちよつと違った経緯があります。両親は二人共医師(整形外科医と産婦人科医)をしていました。両親はぼくが医師になることには反対をしていました。激務で辛い仕事を、息子にはさせたくなかったからでしょう。

中学生の時に、仲の良かった友人が突然くも膜下出血で亡くなりました。今に至っては、この病のことは理解できているのですが、その



当事中学生だったぼくには納得がいかなかったことでした。その時は、救急医療

や病院に強い憤りが湧きました。当時、広島(地方都市)に住んでいたのですが、まだまだ救急医療は十分確立できていなかったのは事実です。両親に聞いても、東京や大阪のエリアを除いて、日本中どこも救急医療体制は整っていないということでした。高校生の時、一緒に自転車通学に行くほど仲が良かった友人が、通学路でトラックにはねられて亡くなりました。中学生の時の思いと相まって、広島には子どもを



救う救急医療体制ができていないことを心底痛感しました。

そして、ぼくは救急医になりました。救急医は、患者さんの命を救うため、全力で挑まなければなりません。故に体力は必須です。だから当時から体を鍛えていました。体力では誰にも負けない医者になろうと本気で思っていました。本気でスポーツ(水球)をやりました。大学時代はインカレに出て、全国優勝をするまで頑張りました。



災害やコロナ感染症の拡大によって、けが人や感染症者が急増し、医師がすべての患者に対応できなくなるような状況となっても、最後まで前を向いて立っていただけるお医者さんになろうと思っていましたし、今でもそう思っています。

そもそも救急医になると決意した根っこところは、小・中・高のいわゆる子どもが予期せぬ不運に巡り合った時に、助かる子の命は絶対救うという思いからです。ぼくは、小児科医を目指してはいませんでした

が、救急で入って来る子どもに対しては、可能な限り診てきました。それは、研修医時代からずっと続けて経験を積んできています。だから多くの重症の小児患者の症例に立ち会って、知見も体に入っています。ただ、重症患者を救うというのは非常に難しいです。特に、大けがをした場合はかなり難しいです。患者さんの命を救うことができない時は、いつも落ち込みます。さらに子どもの場合にはより落ち込みます。今でもお子さんの命を救えなかった場面に立ち会うこともあります。時には、家に帰って大泣きをして動けなくなることもあります。重症小児の外傷例例えば、交通事故とか遊具から転落した、海・川での溺水事故等を扱うのは結構技術的にも精神的にも辛いところがあります。ただ、ぼくがやってきた経緯からすると、逃げてはいけません。ここがぼくの原因だからです。今は幸いにして、重症小児を専門とする先生もおられることはありがたいことだと思っています。重症小児の外傷治療においても、アメリカ等の先進国に引けを取らないく

らしい実績をあげているのも事実です。内科的な分野は、これも専門医がいるので任せています。

命を守るための予防

突然子どもが亡くなることは、ご家族にとっての悲嘆で、人間としてとても悲しい出来事に違いはないと思います。元気だった家族が突然いなくなるということは、相当辛い出来事だと言えます。その中に一定の時間、身をさらす仕事をぼくは選んでやっているのですが、辛くても毎回前を向いて頑張らなといけないと自分を鼓舞してやっています。でも、毎回ご家族の前で泣くわけにはいかないので、氣丈に振る舞って、親御さんを支えようと思いますが、それも難しいことです。亡く



「冬の夜」 版画 (令和2年度)
倉敷市立穂井田小学校 2年 福田 羽菜
サンタさんの家やもみの木を描いて冬の様子を表現しました。冬の自然をたくさん描いて楽しそうにうに工夫しました。

息子が小学生の時には、近所の子から「あそこのおじさん怖いぞ。」と言われていたようです。自転車でノーヘルの子を見かけると、「ヘルメットをかぶれ。」と言いい、水路で遊んでいる子を見かけると、「危ないからあがれ。」と言うような、口うるさいおじさんで通っていました。特に倉敷には水路が多く点在している



ので、昔から細かく周りには言ってきたように思います。

例えば、車に子どもが乗っているだけでは亡くなることはありません。ただチャイルドシート一つとっても、子どもが乗っている車が横転事故を起こした時、チャイルドシートに乗せていない子どもは窓を突き破って外に放り出され、ほぼ即死状態になります。一方、親はきっちりシートベルトをしていて助かるのです。お子さんを失った親御さんは、外来で激しく泣き、チャイルドシートに乗せていればよかったと後悔します。子どもが亡くなって初めて気づくのです。交通事故が起こって、子どもだけが亡くなって、お母さんだけ生き残るケースがとても多いのです。これは親の責任、社会の責任です。チャイルドシートにきちんと乗せる、小中高生になっても、後部座席のシートベルトはきちんと着用する。このことは、警察に捕まらないためにするのではないのです。こんなもの、意味あるの。」と言う人がいるかもしれません、が、しておけばほとんど死にません。死なずに病院に来てくれたら、そ



ここからはぼくたちが全力で治療し助けます。息子の小学校の先生に、チャイルドシート、シートベルトの着用を遵守するよう先生から厳しく言って欲しいとお願いしました。死んでからでは遅いのです。今でも車で走っている時、後部座席に立っている子の車を見ると、頭にききます。あの人が明日泣いて来るかもしれないと思うと、たまらないのです。不思議なもので、子どもの命を亡くすまで親は何もないと信じているのです。また、小中高生になると、自転車事故が多くなります。ヘルメットは確かに面倒くさいです。夏は暑くて蒸れます。髪型が崩れます。が、命を守ってくれるアイテムです。

保護者のみなさんにぼくから願うことは、車に乗せる時はチャイルドシート・シートベルトの着用、自転車に乗せるならヘルメットの着用、海で遊ぶならライフジャケットの着用です。この三つだけでも、岡山の子どもたちが亡くなる数は劇的に減ることは間違いないと思います。

(つづく)

